# 読書の四季

学習院高等科
図書委員会

会　報
No.104

発　行
2012.7.20

## 特集『あの人に訊いてみた！』

今回が第一回目となる『あの人に訊いてみた！』。

記念すべき第一回目は、学習院大学学長・福井憲彦先生にインタビューをお願いしました。

今回は、高等科生が一番気になっているであろう大学の求めている学生像や、学長先生の経験等について質問してきました。

詳しい質問内容とその回答は二面に載せてあるので、ここでは、実際にインタビューしに行っての感想を述べたいと思います。

**感想**　まず第一に！とても緊張しました！ただでさえ私たち高等科生は大学の建物内に入るということが少ないのに、大学構内に一歩足を踏み入れたと思ったらいきなり学長室に直行！これで緊張しない訳がないじゃないですか。しかし、そんな緊張も学長先生がやさしく丁寧に応対してくださるおかげで、すぐにほぐれました。

学長先生の受け答えはとても迅速でわかりやすく、インタビューは私たちが想像していたよりも早いスピードで進行していきました。そのため、私たちが用意していった質問以外にもいくつかの質問をすることができました。

今回のインタビュー記事は、学長先生の貴重な経験や考えをたくさん載せることができたので、とても充実した内容に仕上がっていると思います。二面のインタビュー内容を読めば、きっと今後の人生の参考にもなると思いますので「文字が多いから読みたくない」などと言わずにぜひ読んでください。

以上で、私たちのインタビューについての感想は締めさせていただきたいと思います。

学長先生、インタビューにご協力してくださり、ありがとうございました。

# 学長インタビュー！！

インタビュー先…福井憲彦学長

記者…徳留（委員長）
清水（副委員長）
櫻井（一年）
遠藤（一年）

Q&A

Q高等科生が学習院大学に進学するにあたり、大学側はどのような生徒を求めているのでしょうか？

A第一に、積極的に学び取ろうとする心を持った生徒だと思います。高等科生は他校に比べて意識が高いと思いますが、バラつきがあるように思います。

高校時代は決められたことを勉強するだけだったと思いますが、大学は違います。知識をため込むだけでもなく、一つの分野だけでもなく、自ら色々なことに関心を持って学習することを望みます。今はインターネットで簡単に情報を入手できるようになりましたが、その中で大事なことはみんなが知れる情報の質をいかに読み取るかということだと思います。

Qそれ以外に必要なことはありませんか？

Aやはり、カリキュラムをきちんとこなすことです。例えば高校生で今文系の学部にいこうと決めている人がいたとして、理系は勉強しなくていいや、とは思わないことです。例え歴史だったとしても、数学の論理的思考力も十分に使えます。高校の勉強で大事なことは一つの科目に特化するよりも万遍なく学ぶことです。

Q学長先生は大学時代パリへ留学されていたそうですが、そこでの体験談等をお聞かせ願えますか？

A今の時代では、はっきり言って留学は余裕じゃないですか？　今の人は語学の研修のために留学に行くのかと思いますが、私は歴史（西洋史）の研究のために行ったんですよ。

そこでひとつ驚いたのは、パリの人たちが日本のことを全然知らないことです。日本人が外国人は日本について当たり前に知っているだろうと思っていたことを、パリの人たちは全然知らなかったんです。勿論、インターネットで情報を得ることはできますが、生活様式・文化・宗教、様々なものが異なっているということを、学生時代の内に肌身で感じておくことはとてもいい経験になると私は思います。語学とは道具でしかないですから。

Q近代西洋史を学ぼうと思ったきっかけは何ですか？

A西洋史を専攻しようと思ったのは大学に入ってからです。高校時代から歴史や、文学や、思想に興味があったということが大きいです。特に歴史においては時間に追われて生きるという社会に「なぜ？」という思いがありました。近代とはなにか、世界の中の日本というものに興味がありました。当時はフランス映画が大流行していまして、フランスにとても興味があって。それでフランス近代史に進もうと思ったんです。

Q図書委員会のインタビューということで先生から高等科生に読んでほしい本はありますか？

Aいろいろありますが、高校生のうちは手当り次第に読むのがいいと思います。少しでも興味を持った本は開いて読んでみるのがいいと思います。ただ、本にも情報の良し悪しがあります。なので、情報の取捨選択能力を養うという意味でも、多くの本に触れることが大切です。

学生には、「歴史をやるなら推理小説を読め。」と言っています。たとえば、シャーロック・ホームズは当時のイギリスの世相をよく表しています。このように細部まで読むことが大切ですね。

私が高校生の頃は、新書を一週間に一冊読むという目標を立てました。でも続きませんでしたが。

Qでは最後に高等科生にメッセージをお願いします。

Aいい友達を作って、いっぱい議論してください。いろいろな意見を聞いて自分の意見をしっかり持つことが大切です。

お忙しい中どうもありがとうございました。

# 武者小路実篤について

白樺文学館公式ホームページより

学習院中高等科図書館に所蔵してある武者小路実篤の本は多くある。実は、武者小路実篤もこの学習院中高等科の出身者の一人なのだ。そんな、武者小路実篤について書きたいと思う。

まず、武者小路実篤の生い立ちから書こうと思う。実篤は一八八五年（明治一八年）父・子爵武者小路実世と母・秋子の末っ子として、生まれる。

二歳の頃に父を亡くし、その四年後に学習院初等科に入学する。その頃は、作文は苦手な教科だったそうだ。そして中等学科六年の十七歳になると、のちに共に『白樺』を創刊することになる志賀直哉と同級になる。彼の代表作には、「小僧の神様」「城の崎にて」などがある。

そのまま、学習院高等学科に進み、一九〇六年には、その高等学科を卒業し、東京帝国大学文科大学哲学科社会学専修に入学する。その翌年に学習院の時代から同級である志賀直哉、木下利玄、正親町公和と文学研究会《十四日会》をつくり、お互いの創作を批評し合った。しかし、同年に実篤は東大を中退する。翌年、処女作品集『荒野』を自費出版する。

そして二年後、先ほど申し上げたように、志賀直哉、有島武郎とその弟である有島生馬、思想家でもある柳宗悦らと『白樺』を創刊する。そして実篤らは「白樺派」と呼ばれた。

その後、その『白樺』において、日本最初の西洋近代美術の美術館設立や「新しき村」の創設を提唱した。この『新しき村』は、のちに荒れた土地で労働にいそしみ、自己を磨き、お互いを生かし合うための共同生活の場として建設された。

その後、小説だけではなく、演劇や思想、美術など幅広い分野で活動し、一九七六年四月九日に亡くなった。

ここからは、武者小路実篤の代表作を挙げて、紹介したいと思う。これで、興味を持った人はぜひ、図書館で借りるでも、本屋で買うでもいいので読んでいただきたい。

『友情』

この本はまだ、「新しき村」に住んでいた武者小路実篤が書いた小説で一九一九年に書かれ始めている。もともとは新聞の連載小説であった。

この話は簡単に言うと三角関係の話である。とはいっても、昼ドラなどのようにドロドロしすぎず、割とストレートなものだと私は感じた。また、私が思ったことはいかに「友情」が脆いものであるかということだ。確かに固い「友情」もあるが、「恋愛」のことと重なるとやはり、「恋愛」のほうを人間は優先してしまう。読んで頂くと分かるのだが、たぶん作者である実篤はそんなことが言いたかったのではないだろうか。そのことは、「ともかく恋は馬鹿にしないほうがいい。人間に恋と云ふ精神のものが与えられている以上、それを馬鹿にする権利は我々にない」というセリフからも感じた。

『愛と死』

この話も簡単に言うと遠距離恋愛の話である。それに加え、内容も今の恋愛小説とほとんど変わらず、親しみやすく読みやすい作品だ。武者小路実篤の作品の中で私の一番のお気に入りで、ぜひ読んで頂きたい。

主人公は愛人の「死」により生き方を変え、人々のために生きることを誓うのである。私はそんな主人公を尊敬し、また見習いたいと感じた。

身近な人の死というものは、人の生活だけではなく生き方、価値観を変えるものである、そんなことを伝えたかったのではないかと私は感じた。

武者小路実篤の作品は少しテーマが重いが、全体的に分かりやすい文章で書かれているので読みやすいと私は思う。この二作品以外にも考えさせられる本もたくさんある。

最初にも申し上げたが、ぜひ手に取っていただきたい。